

教員活動状況報告書

提出日：令和 5 年 3 月 3 日

所 属：獣医学部 獣医学科

氏 名：塚本 篤士 職位：准教授

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト(必修, 選択) (受講者数) (学部向け, 大学院向け) (學理データ活用)

教師として何に責任を負っているかを明確にし、自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。

※分量の目安：2～5行（80字～200字）（科目表以外）

※分量（字数）はあくまで目安ですので、超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

動物の専門家として、実験動物と対峙するためには高い倫理観が求められる。獣医療倫理・動物福祉学や実験動物学の授業を通し、動物の専門家にも必須となる実験動物福祉の考え方を教育している。また、実験動物学の講義・実習を通して近年社会ニーズが増加している実験動物学分野の人材（管理獣医師・実験動物技術者）を養成するとともに、周辺領域の分野にも対応できる人材の育成を行っている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
実験動物学	獣医学科	必	3	148
実験動物学	動物応用科学科	必	2	123
実験動物学実習	獣医学科	必	2, 4	288
実験動物学実習	動物応用科学科	選	3	69
実験動物技術者夏季特別実習	動物応用科学科	自	4	13
獣医療倫理・動物福祉学	獣医学科	必	2	148

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか, 自らの信念, 価値, 目指すもの）

獣医学や ICT の進展、グローバル化の促進により、近年獣医師に求められるスキルが高度化している。獣医師が対応すべき課題は分野横断的なものが多く、単一の学問では対応ができないケースが増加している。動物応用科学科に於いても動物生命科学という幅広い学問の 1 つのピースとして実験動物学が存在し、行動学や生化学、発生工学、感染症

学など様々な領域との関連性がある。

これらのことより、実験動物学の知識や技術が獣医学や動物生命科学でどのような位置づけにあるかを明確にするとともに、応用力、問題解決能力を引き延ばし、幅広い課題に対して柔軟に対応できる実践的な人材育成を行うことを重要視している。

※分量の目安：8～12行（320字～480字）

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）

実験動物学は総合的な学問であり、多くの獣医学領域の学問とオーバーラップするという特徴があることから、周辺領域の学問との接続を意識して教育を行い、学生が学んだことをより多くの場面で生かせるように工夫をしている。動物応用科学科の学生に於いても実践的ジェネラリストの育成の観点から、周辺領域との連携は重要であり、他分野との関連性が理解できるよう教育を行っている。実験動物学は倫理学の側面もあり、動物の専門家として動物と対峙する上で基本になる実験動物福祉を理解させることを重要視している。

一方、本学の特色上ライセンス教育の充実も不可欠である。獣医学科では獣医師免許、動物応用科学科では実験動物技術者1級の資格取得をサポートするため、知識・技術を効率よく吸収できるようなわかりやすい授業を心掛けている。

卒業研究では、思考力、応用力、情報リテラシー、プレゼンテーション能力など社会人全般に必要なスキルを引き延ばすことを重要視して教育を行っている。

※分量の目安：15～24行（600字～960字）

アクティブラーニングについての取組

一部の授業において臨床推論形式の演習型授業を取り入れ、学生がより主体的に取り組めるよう工夫を行っている。

ICTの教育への活用

昨年に引き続き授業では学理やGoogle Driveを活用して学生と情報共有を行っている。

卒業研究の指導においてもGoogle DriveやMicrosoft teams, Google Meetを積極的に活用している。ICTの活用により、学生のスケジュールやタスクを容易に共有することができ、グループワークでの研究ディスカッションや学生の状況把握が以前よりも効率的になったように感じる。

<p>4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）</p> <p>① <u>教育（授業、実習）の創意工夫（A）</u></p> <p>② <u>学生の理解度の把握（C）</u></p> <p>③ <u>学生の自学自習を促すための工夫（B）</u></p> <p>④ <u>学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（B）</u></p> <p>⑤ <u>双方向授業への工夫（C）</u></p> <p>※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）</p> <p>上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。</p> <p>⑥ <u>国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科， M 学科の教員の方のみ記載してください。）</u></p> <p>対面授業をベースに一部遠隔授業とのハイブリッド形式で授業を行った。遠隔で受講する学生も考慮し、要点を最初のスライドに 1 枚でまとめ、ポイントが一目でわかるようにするとともに、適宜演習問題をまじえ、飽きさせないよう工夫を行った。また、学生の負担を考慮し、スライドの長さをなるべくコンパクトに収めるようにした。遠隔授業については授業期間中メールや MEET での質問に対応し、授業内容に対する問い合わせに対応した。</p> <p>学生の理解度については小テストや定期試験の結果を元に把握した。授業のスライドは学理に事前にアップし、予習ができるようにした。また、追加学習をしやすいように、各スライドに関連ページへのリンクをつけた。対面実習については、代替法教材（視聴覚教材とシミュレーター）を積極的に活用し、技術習熟の効率化を図るとともに、動物福祉に配慮した実習を行った。実験動物学実習で用いる教材の使用については毎年アップデートを行っており、今年度は映像教材を作成し直し、実習において活用した。実技の動画を映像の専門の方々の協力を得て、撮影・編集しなおし、アニメーションや CG を加えることで受講生が一目で実技のイメージをつかめるよう工夫を行った。受講生に対するアンケート調査の結果より、特に映像教材の活用頻度、満足度が非常に高く、さらに初めて生体を使用した実習を受講する前の心理的負担（緊張・不安）を軽減することが明らかとなった。</p> <p style="text-align: right;">※分量の目安：15～24 行（600 字～960 字）</p>
<p>5. 学生授業評価</p> <p>① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u></p> <p>昨年度授業評価の結果は概ね良好であり、授業に対する取り組みが評価されていた。</p> <p>② <u>①の結果はどうか。</u></p> <p>実習工程の見直しをさらに行ったことで、短時間に効率的な実習を行うことができた。</p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</u></p> <p>実習については今年度の内容をベースにして内容をさらに充実させていきたい。</p> <p>※分量の目安：4～7 行（160 字～280 字）</p>
<p>6. 学生の学修成果</p>

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

(参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。)

獣医学共用試験や国家試験への対応として、成績下位の学生に対しては、早い時期に補習を行うことが有効だと思う。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

当研究室で担当している実習教育の方法を実験動物技術者協会にて紹介した

※分量の目安：4～7行（160字～280字）

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

開講されている FD 研修会には参加するようにしている。実習については、独自に学生にアンケートを取り、教育方法の向上に活用している。

※分量の目安：1～2行（40字～80字）

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。

学生が社会に出てから分野横断的な課題に対処できるよう、実験動物学と周辺学問領域の連続性をよりクリアに説明するよう心掛ける。今年度は実習において分野横断的で複合的な課題を出し、学生に多面的なものの見方について考えさせるような機会を作った。しかしながら授業におけるアクティブラーニングの促進については引き続き課題があり、思考力や、問題のとらえ方を引き延ばすために演習やディスカッションの比率を上げることが必要と考えている。ICT を活用したオンライン教育は情報伝達効率が高い一方で、学生のモチベーションを継続して維持する上での課題がある。コロナ禍の特殊な環境下で数年間過ごしてきた学生をどのように伸ばしていくかについては、対面形式に戻った現在も引き続き課題として検討していく必要がある。卒業研究の指導では学生の意欲を向上させるために指導の頻度や方法をさらに改良していきたい。ライセンス教育の対応についてはこれまで通り、知識・技術を効率よく吸収できるようポイントをわかりやすく説明したい。長期的には実験動物学の非常に広い学問領域の中で専門家としてカバーできる分野を広げていきたい。

※分量の目安：3～6行（120字～240字）

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ